

## # 特別編

こんにちは。塾長の大井です。

5期生の入試のさなか、このホームページを運営している会社が「私の独立・起業物語」というテーマでエピソードを募集していました。少しでも5期生の後押しになればと思って、私もTOP設立のエピソードを書いて応募しました。

結果としては1次審査を通っただけの拙文ですが、私たちには原点を振り返るいい機会となりました。

ご笑覧下されば幸いです。

## 『何度でもこの道を。』～前編～

幼いころ、誰もが何かに憧れる。

宇宙飛行士、サッカー選手、オリンピック出場。

それは心をかき立て、胸を焦がす。激しく燃え爆ぜる炎のように。

私もかつてそうだった。誰かに憧れ、何かを夢見る子どもだった。それでも今は、誰も目指していない。

もう誰かに憧れることもない。

「お前なら必ずいい先生になれる。」

始まりは友人の一言だった。

学生時代、進路に悩んでいた私に、塾講師をしていた友人がそう言った。

彼の口調は、助言というより、確信に近いものだった。

私はその言葉に背中を押され、半ば確認するような気持ちで大手進学塾に入社し、2ヵ月後には教壇に立っていた。

初めは全く思い通りにいかなかった。ルーキーのくせに、理想が高すぎたのだろう。

理想と現実の差に毎日悔し涙を流して帰った。

「俺に習う生徒が不幸だ。」

毎日そう思い、今日辞めよう明日辞めようと考えた。

ただ準備だけはやった。限界までやった。下手くそはどうにもならない、でも手抜きだけはしたくなかった。

今思うとそれは、誰かの人生に関わる教師としての、最初の矜持だったのかもしれない。

そんな無力だった私を、それでも生徒たちは慕ってくれた。

そして、合格の喜びを共にし、徐々にこの仕事も悪くはないなと思うようになった。

それでもやりがいは感じたが、生きがいとは呼べなかった。

それは人生の中の、通過点のような場所だと思っていた。

しかし、またある人の言葉が人生を動かす。

新人時代に上司だった人が、まだ若手だった私を最難関クラスの担当に抜擢した。

異例と言ってもいい人事だった。

私はその御三家クラスを、特別な生徒が集まり、特別な先生が特別な授業を行う、特別な場所だと思っていた。

(ふさわしくない。)

すぐにそう感じた私だったが、その上司の推挙の言葉を人伝てに聞いた。

「『大井を御三家クラス担当にしないのは、会社の損失だ！』 そう言っ  
てたよ。有無を言わさぬ形相だった。」

これを聞いて、腹は決まった。使命だと思った。

実際に御三家クラスに立ってみると、私の先入観は見事なまでに崩された。

御三家クラスの生徒たちは、どこにでもいる、普通にデコボコのある子どもたちだった。

甘えんぼもいたし、お調子者もいた。

ただ一つだけ他の子どもたちと違っている点があった。

それは合格に懸ける切実さだった。

私はそこに文字通り胸を打たれた。打ち震えるくらいに胸を打たれた。

そして中学受験が、彼らを導く師によって、劇的に変容するものだと知った。

そこから子どもたちは、私にとって生徒から家族に変わった。

(後編につづく)

2019年2月18日

大井雄之